

通り過ぎる町のざわめきの中で、まわりのお寺からは、夕方のおつとめをするかねの音が聞こえてきました。

上野の山の方に、からすがとんでいくのを見あげながら、四郎は、つめたくかじかんだ手をこすりあわせていました。

「つらいか、四郎。」

ふと、うしろから声がかかったので、ふりむくと、嘉納が道場の入り口に立って、こちらを見すかしていました。

「いいえ、——はい、つめたいです。」

「つめたくても、それをのりこえるのが、講道館の柔道なのだぞ。四郎、自分にかつ、ということばを知っているかね。人間には、いろいろな誘惑がある。弱い心は、いつもふらふらしている。つらいことをさけて、楽をしたいという弱い心に、まけてはいけないのだ。そんな自分の心を、自分でおさえ